

生きている ユダ

ゾルゲ事件—その戦後への証言

尾崎 秀樹

昭和五十一年十月二十日 初版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

ユダに生きている



著作者

尾崎 秀樹

発行者

角川 春樹

印刷者

中内 佐光
東京都文京区関口一ノ二四ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
郵便一〇二〇東京③一九五二〇八

株式会社 角川書店
電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

曙印刷・多摩文庫

0195-139001-0946(0)

生きているユダ

ゾルゲ事件——その戦後への証言

尾崎秀樹



角川文庫

3354

序

ぼくがここに書こうとする手記は、裏切られ、死刑にされた兄・尾崎秀実の検挙にまつわる疑惑をとき、秀実を絞首台に送ったユダ——発覚の端緒を提供した男——をさぐり出そうとした戦後十年にわたる記録である。

肉身の兄の仇を討つという感情は、その語感——封建的で血腥い^{ちなまぐさ}ニュアンスとは別に、今日でもけっして存在理由を失っていない感情の一つである。ぼくは戦後十年のほとんどすべての時間をそれに賭けた。

ぼくの足どりはたどしかった。その道をぼくはひとりで歩いた。組織的な一切の力から疎外され、逆に「スパイ」という烙印^{ろういん}までおされて、傷つきながら進んだ。

進歩的と名のつく人々が、一人として「王様の耳はロバの耳!」「王様はハダカだ!」といったさなかったとき、それを疑い、不審に思ったのは、長屋のおかみさんや、町の労働者たちだった。また「文化会」の子供たちだった。ぼくはこの手記を書くに当って、あらためて、その一人一人の表情を思い起こす。かれらの健康な常識はどんなときでも、ことの裏にひそむ、不合理を見ぬき、それを許さなかった。そしてぼくに力を与えてくれたのだ。

しかしぼくは、最後には、それらの力からもきりはなされ、おし出されてしまった。ぼくとかれらをへだてるものは、ぼくに対する不可解な中傷やデマだった。その不可解な中傷やデマをたぐってゆくと、そのさきにはかならずといってよいほど、伊藤律の姿があった。

伊藤律から流される噂うわさの暴力は病床にまでおしよせてきた。ぼくは転々と家に移ったが、噂はどこまでも追ってくる。この手記を書くことを断念せずにはいられなくなるまで、かたちをなさない圧迫は迫ってきた。

ぼくが再び手記を書く気力をとりもどしたのは、この問題の真のひろがりや、あらためて身にしみて自覚した日に始まる。

それは、共産党の裏切者、伊藤律除名の日だった……。

著者

『生きているユダ』について

戦後、私達は不思議な味をもった多くの事件にぶつかったが、この書も手ごたえのある、しっかりした、真面目な追求の書でありながら、なお目もなく鼻もないのっぺらぼうな現代の部分の手ごたえもない何処かの暗いはしに触れているような不思議な後味に満ちている。尾崎秀実の異母弟である著者がゾルゲ事件の発覚の端緒について不審をいだいて進めてゆく究明と、尾崎家と親しい伊藤律と著者とのはじめから気の合わない関係が、次第に一本の糸にまとまってゆくかたちは、アイリッシュの『幻の女』のなかの主人公の推理と証明が、犯人である友人の妨害と湮滅をうける異常な成り行きを思わせるが、しかし、ここでは伊藤律の罪過についての確証がなかなかでてこない。ひとつの上部へはいりこんだこの人物は、党内の確執を契機として、逆に、さらにまた真相不明な新しい暗い謎のなかに沈んでゆくようにみえる。

そこで明らかなのは苦しい戦後の生活をひたむきに生きる若い著者の真摯な態度であり、また、党活動の末端における細胞生活と党の上層部における伊藤律を芯とした確執のかたちである。これは戦後史の重要な資料たるを失わない。そして、ここで最も興味深いのは、戦前に諜報活動をしていた一員たる川合貞吉の人物像が鮮かに描けており、それに関連してアメリカのスパイ組織

が戦後驚くべき広い網を張って活動している状況が示されていることである。鹿地亘^{かぢゐ}の手記にも現われてくるこのアメリカの機関は水面上の氷山の一角として私達を慄然^{りつぜん}とせしめるが、アグネス・スメドレーと対決せしめるために使おうとした川合貞吉の戦後の挿話^{そうわ}は、すべてが暗黒の裏面と地下へ隠れている現代ののっぺらぼうな無気味な顔をあらわしていて不思議な後味がある。

私は多くの知っている名がでてくる興味にもひかれて、一晩で読了したが、この書を読みおわると、ただにかつてあったひとりのユダについて思いをはせるにとどまらず、現在、無数のユダがさらに起こり得べき状況について凝然と沈思せざるを得ない。

埴谷雄高

目次

序

『生きてゐるユダ』について

埴谷雄高

三 五

きざまれた過去

二

昏い太陽

三六

疑惑の影

三七

描かれた波紋

一五

奇怪な日々

一七

父の死

三三

心の底から憎むことを

二四

それから

二九

付・革命——伝説

三〇

解説

五木寛之 三五

生きて いるユダ

ゾルゲ事件——その戦後への証言

その枝は風雪や嵐をへて痛めつけ
られることがあっても、やがて小
枝を伸ばし葉をしげらせて榮えて
ゆくことでありましょう。

へ愛情はふる星のごとく

尾崎秀実

きざまれた過去

1

ぼくは二番目の兄尾崎秀実とは、ほとんど一緒に暮したことがない。

秀実がぼくが生まれない前に分家していたし、ぼくは幼稚園に通いだす一年ほど前まで、父とは別の家に住んでいたのだ。父の家と母の家——ぼくの家は別々にあった。父の家には「おばあちゃん」と呼んでいた父の先妻がいた。おばあちゃんはいつも長火鉢ながひばちの前に坐まって、きせるで煙けむり草くさを吸すっていた。

その日は——着ぶくれていた記憶があるから寒いときだったに違いない——めずらしくおばあちゃんが長火鉢の前にいなかった。家中探したが見当らない。いつもと違い、出入りする人が多くてなんとなくさわがしかった。かまってくれる人がないのでぼくはむくれて、ひとりで遊んでいた。そこへいきなり誰が入ってきた。外人のように鼻が鉤型かぎがたにまがっている。「秀実お兄ちゃんだ」なんとなくそんな気がした。あとから誰かに教えられたのかもしれない。

「坊や、何してるの？」

兄はかがみこんで聞いた。ぼくは黙って火箸^{ひばし}をいじっていた。

「おばあちゃんがなくて淋しいか？」

彼はぼくを抱きよせた。

「さあ、高い高いをしてやろう。そら、富士山が見えるよ」

秀実^{ひでみ}はぼくを高くさし上げて、ぐるぐるまわった。ぼくはうれしくて声をあげた。しかし兄はぼくをすぐ下ろしてしまった。それがものたりなかったので、ぼくは唇^{くちびる}をとがらせて秀実を見上げていた。

「淋しい？」

兄はぼくの小さい肩に手をおいて聞いた。ぼくが首を横にふると秀実^{ひでみ}は前かがみになって、「淋しくないね……」と笑ってみせた。ぼくは秀実の顔を凝^{みつ}めた。兄の唇が少し開きかけたので、何かいうのだと思って待った。しかし秀実は何もいいださない。ぼくは覗^{のぞ}き込んでいる秀実の眼を見た。その瞳^{ひとみ}はうるんでいるようだった。

「おや、この帯、大分ダメになっちゃってるな」

秀実^{ひでみ}は急に立ち上がり、ぼくの色あせた帯をつまんだ。

「帯を買ってあげようね」

兄はそう言って電話をかけに去った。

その日ぼくは母の家に帰って、何度もそのことを話した。

「ねえ、大きなお兄ちゃんね。ぼくの帯買ってくれた」

おばあちゃんは、そのつぎ行ったときも、つぎのつぎのときもいなかった。母の家に戻るときいつもお土産みやげをくれたおばあちゃんは、それからずっと見えなくなり、長火鉢の前にはおばあちゃんの座布団ざぶとんだけがぼっそりとおいてあった。

それからまもなく母も一緒に父の家で暮らすようになった。おばあちゃんの座布団にはぼくの母が坐った。

……幼い日の夢のような思い出の一つだが、ぼくの頭には母を失った秀実の、あのときの瞳の色が焼きついている。澄んだ、何か訴えたげなあの瞳……。

ぼくは成長するにつれて、肉身の兄という以上の結びつきが、秀実を思う心のうちにでき上がっていることを知った。それはぼくと母とをひき離そうとした親族会議の模様や、戸籍謄本に書いてあった「私生児」という文字や、ぼくが自分の出生について尋ねるときに、きまって見せる母の渋い表情と関係していた。またそれらにたいするぼくのせいっぱいの反抗とつながっていた。子供ごろに世間の白い眼を意識しながら育ったぼくの幼い頃こころの記憶のなかで、兄秀実の思い出は、母の愛情のほかに、たった一つといってもいいほどの暖かい印象として残った。

秀実が検挙されたのは一九四一年（昭和十六年）十月であった。両親は検挙後間もなく知人か

ら連絡を受けて知ったらしい。だが、ぼくたちには一言も話してくれなかった。ぼくがはっきりと兄の検挙を知ったのは司法省が事件について発表したときである。発表は、翌年の四二年五月に行われた。

「国際諜報団、首魁しゅがい五名検挙。

……昭和十六年十月以降東京刑事地方裁判所検事局において、警視庁の探知にもとづき……鋭意捜査中なりしリヒアルト・ゾルゲらにかかるいわゆる国際諜報団事件は、このほど主要関係者にたいする取調べ一段落を告げ本日その中心分子たる左の五名に対し、国防保安法、治安維持法、軍機保護法各違反等の罪名をもって東京刑事地方裁判所に予審請求の手續を執りたり。

……フランクフルター・ツァイツング社日本特派員、リヒアルト・ゾルゲ。

……アヴァス通信社通信補助員、ブランコ・ド・ヴーケリッチ。

……画家、宮城与徳。

……元満鉄嘱託、尾崎秀実。

……青写真複写機製造業、マックス・クラウゼン。

本諜報団はコミンテルン本部より赤色諜報組織を確立すべき旨の指令を受け、昭和八年秋わが国に派遣せられたるリヒアルト・ゾルゲが、当時すでにコミンテルンより同様の指令を受け

来朝策動中なりしブランコ・ド・ヴーケリッチ等を糾合結成し、自後、順次宮城与徳、尾崎秀実、マックス・クラウゼンらをその中心分子に獲得加入せしめ、その機構を強化確立したる内外共産主義者より成る秘密諜報団体にして、十数名の内外人を使用し、結成以来検挙に至るまで長年月にわたり、合法を擬装し巧妙なる手段によりこれを諜報しいたるものなるが……。

尾崎は極めて熱心なる協力者としてゾルゲの絶対的信頼の下にその社会的地位及び広汎なる交際範囲を利用し、諸般の情報及び資料を多数入手してこれを提供すると共に絶えずゾルゲの相談に応じ、内外の重要諸問題につき自己の見解及び判断を披瀝して……補佐したる等諜報団においてゾルゲと並ぶ重要役割を果し……」

当時ぼくは、中学の二年だった。司法省発表の記事を父や母にかくれて何度読みなおしたか知れない。秀実兄さんがスパイだなんて。ぼくにはどうしても理解できなかった。学校へ行っても、帰って机に向っていても、寢床に入ってから、そのことばかり考え続けた。

「支那事変発生以来朝野協力して防諜措置の万全を期し、詭激^{きげき}思想の防遏^{ぼうあつ}に苦心して来たのであるが、なお尾崎らの左翼分子が依然その信念を捨てず、かかる売国的所行に出たことは……」読み返してここまでくると、先へ進めなくなった。そして、いつも新聞をおいて考え込んでしまう。兄が売国奴！新聞の記事は、どの一行をとってみても信じることができなかった。

街を歩いていて、街角や電柱にはられた防諜のポスターを見て立ち停まってしまうことがよくあった。「ちょっと待て、いつてよいこと、わるいこと」「あなたは狙^{ねら}われている！」「スパイは